



# 18世紀末イギリス地方社会の職業構成 : バッキンガムシャー民兵隊徴募基本台帳の分析

重富, 公生

---

**(Citation)**

国民経済雑誌, 189(1):59-74

**(Issue Date)**

2004-01

**(Resource Type)**

departmental bulletin paper

**(Version)**

Version of Record

**(JaLCD0I)**

<https://doi.org/10.24546/00055903>

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00055903>



# 18世紀末イギリス地方社会の職業構成

——バッキンガムシャー民兵隊徴募基本台帳の分析——

重 富 公 生

『民兵隊徴募基本台帳』は、18世紀イギリスの軍事的・政治的必要から作成されたリストであるが、幸い1798年のバッキンガムシャーを対象としたリストがほぼ完全な形で現存している。本稿はこの史料を用いて、18世紀末のバッキンガムシャーにおける職業構成の特徴を明らかにしようとするものである。この時期にはイングランドの北部・中部諸州を中心としてすでに急速な工業化が進展しつつあったが、この州ではいまだに手工業に基礎をおいた農村工業が中心で、全体としては農業中心の生業の分布を特徴としている。しかしいくつかの特定の産業が、地域特化をとれないながら着実に成長しつつある状況を、史料のデータから確実に読みとることができる。

キーワード バッキンガムシャー、農村工業、職業分布、産業革命

## 1 はじめに

イギリスにおいて公式の職業統計（センサス）が全国規模で集計されるようになったのは19世紀半ばのことである。しかしそれ以前の時期についても、さまざまな種類の史料を用いて、時期や対象を限定した職業構成の分析が行われてきた。17世紀のグレゴリー・キングによるラフな全国統計などを別とすれば、広域的な情報は得がたいので、それらの研究は特定の都市を対象としていることが多い。とくにロンドン（ないしさらにエリアを絞った市区部）は、しばしばそのような対象としてとりあげられてきた<sup>1</sup>。しかし州という比較的広いエリアを対象とする場合、どうしても情報の制約を受けることになる。

本稿は、18世紀末のバッキンガムシャーにおける職業構成ないし職業分布の実態を、民兵隊徴募基本台帳からのデータによって明らかにしようとするものである。この史料は、他の時期や州については完全なかたちで現存せず、管見のかぎりでは本格的な分析の対象としてとりあげられることはほとんどなかった<sup>2</sup>。いうまでもなく18世紀末は、「産業革命」が開始して間もない時期にあたる。バッキンガムシャーは、全国規模での工業化を直接牽引するような産業部門を有していたわけではなく、経済構造や職業構成の変化も緩やかなものであった。そのような地方社会がこの時期にどのような職業構成を示し、そしてそこからなにを読みと

ることができるのかをみてみたい。

## 2 民兵隊徴募基本台帳について

最初に本稿で用いる史料について簡単に説明しておこう。承知のように、軍事目的で作成された資料を社会経済史研究に用いることは、16世紀以来作成されたマスター・ロール (militia muster rolls) の分析など、いくつかの例があげられるが、『民兵隊徴募基本台帳』(Posse Comitatus) も軍事関係の資料である。18世紀半ば以降の対フランス・対アメリカ軍事政策要請の高まりをうけて、1757年に「新国民軍」(New Militia) を組織するための法令が成立した。それにより、各州は割り当てられた一定人数の民兵徴兵名簿(対象は18歳から45歳までの男子)を枢密院に提出することが義務づけられた。1790年代になると革命フランスの大陸での台頭とイギリス侵略の危機が生じ、1798年には対象を大幅に拡大した名簿が作成されることになった。すなわち、州内のすべての15歳以上60歳未満の男子(従軍中の者は除く)がリストの対象となったのである。そして全員について職業、荷車や馬の所持状況も記された。

1798年の『民兵隊徴募基本台帳』(以下、「台帳」と略記)が、イングランドおよびウェールズ全州のなかで完全なかたちで残っているのは、残念ながらこのバッキンガムシャー<sup>3</sup>だけである。ほかの州で残っている場合は、部分的ないし要約的情報にとどまる。なぜバッキンガムシャーにおいてのみ残ったのか、決定的な理由は不明である。ただバッキンガムシャーは、ロンドンから各地への人員・物資の移動の通過点であり、対外のみならず国内各地の食糧騒乱等を鎮圧する場合にも戦略的に重要な場所であった。また州知事(Lord Lieutenant)をつとめていたバッキンガム侯爵が徴兵・派兵に積極的に協力していたため、全国的な作成命令が降るまえにすでに台帳の作成に着手していた<sup>4</sup>。

オリジナルの台帳は大英図書館とバッキンガムシャー州文書館(County Record Office)にそれぞれ保管されており、両者の情報は若干の差異もあるが、本稿で用いた州史料協会(Buckinghamshire Record Society)による翻刻版は、各地域の担当者が直接集計した状態の史料とみられる州文書館版によっている。翻刻版は編者のI. F. W. ベケットによる簡潔な序文のあと、郡ごとにすべての教区の民兵徴募対象者について、職業別に氏名が記されている。リストの性質上、“lame”, “infirm”, “deaf”, “shot in arm” などといった身体上(場合によっては精神上)の特記事項が付加されている者も多い。また欄をあらためて各自の horse, waggon, cart, 水車, 風車の所持数が記載されている。

原則として従軍中以外のすべての対象者を記載することが台帳の主旨であったが、それ以外でもさまざまな理由からけっして無視できない粗漏が生じている。史料としての信憑性にかかわる補足率はどの程度であったのか。1798年について、それを判定できるような人口のデータは存在しない。いちばん近い時期の1801年センサスによれば、州の人口は107,900人で

ある。<sup>5</sup> 台帳でリストされた総人数は23,547人。カスマールの算定によれば、18世紀末に15歳から59歳の人口が占める割合が55%、1798年と1801年の間の人口増加率が1.5%であったと推定されるので、それを加味すればこの年齢の男子人口のうち、12.01%が台帳から抜け落ちていることになるという。<sup>6</sup> この欠落率をどう判定するか。ベケットは、台帳の数値はこの時期の職業分布の正確な全体像を示すものとははいえないが、しかし19世紀半ばに公的な職業センサスが作成される前の時期にあっては、この台帳は18世紀末から19世紀初頭の時期のバッキンガムシャーの職業分布にもっとも近似した情報をあたえるものとして、貴重な資料であるとみている。<sup>7</sup> したがって、ここではそういった史的な意義と限界をふまえたうえで、台帳からの情報を汲みとるべきであろう。とくに女性がふくまれないことから生じる職業分布上のバイアスは看過できないが、それについてはのちほど補足する。

### 3 州 概 観

つぎにバッキンガムシャーの地理的・経済的特徴について簡単に述べておこう。バッキンガムシャーは位置的にはミッドランド地方の最南部にあたる。ミッドランドはイングランド中央部の、まとまった面積を有する平場の穀作地帯であり、バッキンガムシャーもその周辺部を形成していた。ただし、ロンドン周辺のいわゆる Home Counties にも隣接しており、場合によっては近隣のパークシャーやハンプシャーなどとともに南部諸州に分類されることもある。<sup>8</sup> 州の面積は全国平均より小さく、ほぼ南北方向に細長く伸びた州である（南北52マイルにたいし、東西の幅は広い所でも12マイル<sup>9</sup>）。

地理的には州は自然条件によりほぼ二分される。南部は緩やかなチルトーン丘陵地帯（Chiltern Hill）で、良質の耕地が広がり、森林も比較的豊かであった（ただし最南端部のテムズ川流域は砂礫質土壌で耕作には適していない）。中央部以北はエイルズベリー溪谷（Vale of Aylesbury）の占める割合が高かったが、この溪谷地帯は、西はオックスフォードシャーとの州境から東はハートフォードシャーとの州境まで、北は Cottesloe Hundred（あとの地図1のF）まで広がっていた。それよりさらに北部の地域も峡谷の一帯とみなされることもある。この峡谷では樹木はほとんど生育せず、古くから羊の放牧が盛んであったが、後には酪農業に比重が移っていく。<sup>10</sup>

社会経済的な特徴は次節以降の議論の対象となるが、一般的にはこの時期のバッキンガムシャーは基本的に農業州であったとあってよい。台帳が作成された18世紀末には、イングランド北部・中部の諸州が主導するかたちで産業革命がすでに始まっていたが、バッキンガムシャーはまだこの時期には急速な工業化・機械化の影響をほとんど受けていない。この州は、主要な埋蔵鉱物資源を欠き、工業化により急成長した都市もなかった。現在にいたるまで著名な大都市は存在せず、いくつかの比較的規模の大きな町があるにすぎない（ただし新しい

住宅都市として開発された北部の Milton Keyens はやや規模が大きい<sup>11</sup>)。18世紀末までにバラ(都市)格をあたえられたのは Buckingham, Chepping Wycombe, Wendover, Amersham, Great Marlow であったが、うちあとの三つは経済的にはそれほど重要ではない小規模な市場町にすぎなかった。もっとも、農業州とはいえ農村社会の日常的必要を満たす程度の手工業は当然ひろく分布しており、史料にも多種多様の職業表記がある。それ以外に、17世紀以降バッキンガムシャーの地理的利点を生かすかたちで特定の業種が成長してくる。レース編み、藁編み、製紙業、椅子作りなどがそれにあげられよう。

州の立地上、ロンドンと地方主要都市をむすぶ複数の幹線道路が通っており、そのなかにはローマの支配期に遡る古いものもあったが、鉄道のないこの時期には水路の役割も大きかった。可航河川としてのテムズ川やウーズ (Ouse) 川のほかに、後述するように18世紀の末にはグラント・ジャンクション運河の建設も始まっている。

#### 4 州全体の職業分布概観

ここではさまざまな職業・職種が州全体でどの程度の数存在していたのかを、概略的に観察してみよう。台帳に記された職業は総計して375種類である。ただしほぼ同じ職業を違った言葉で表現していると思われるケースも少なくない。「車大工」の wheelwright と wheeler, 「レース商人」の lace dealer と lace merchant, 「手袋職人」の glover と glovemaker などがその例である。こういったケースについては差し支えないと判断される範囲で合算した。一方, labourer や servant として計上されている人数はきわめて多い。いずれもより大きな分類である職種として「農業労働者」の項目に入れられているが、業務内容自体はそうとうの個人差があったと推測される。しかしそういった詳細についての情報はほとんどない。また farmer & dairyman, bricklayer & mason のような兼職を示す記載が少なくないが、一方で実際に兼職していた者について単一の職業しか表記していないこともあり、実際の兼職者はずっと多いとみられる<sup>13</sup>。

[表1] は記載のあるすべての職業を、その内容によって22の職種に分類したものである。分類の仕方は編者のベケットが用いた規準をそのまま踏襲した。ベケットの分類では専門商人が「商業・サービス業」にふくまれる場合と、関連する製造業の職種にふくまれている場合とがあり(たとえば calve dealer は前者に, horse dealer は「馬具製造・販売業」に分類されている), 選別基準がはっきりしないケースもある。しかしここでは集計の便宜上この規準に従った。それぞれの職種には、「地主階級」のように esquire, gentleman などわずか6種類しかふくまないものから、「商業・サービス業」のように42種類が記載されているものまである。

この表では州内のそれぞれの職種の総人数と、その職種のなかで10名以上の人数が記録さ

表1 職種別総人数および職種細目

職 種	総人数	職業細目 (10人以上のみ、カッコ内は人数)
地主階級	167	ジェントルマン (108), エスクワイア (53)
聖職者(国教会)	113	牧師 (71), 副牧師 (14), ミニスター (10)
聖職者(非国教会)	33	有資格教師 (12)
専門職	134	校長 (52), 外科医 (34), 弁護士 (27)
官 職	188	巡査 (117), 物品税徴収官 (23), 教区吏 (20)
農場経営者	2,254	農場経営者 (2,017), 酪農経営者 (60), 農場兼酪農経営者 (56), 農場経営者の息子 (55), 牧畜業者 (24), 農夫 (20)
農業労働者	13,589	労働者 (9,316), サーヴァント (3,712), サーヴァント兼労働者 (238), 庭師 (192), 羊飼 (38), 乳搾り (20), 子牛助産夫 (17)
商業・サービス業	1,522	仕立屋 (370), 肉屋 (339), パン屋 (330), 食料品商 (143), 小売店主 (79), 織物商 (66), 商人 (39), 髪結 (28), 床屋 (13), 煙突掃除 (12), 印刷商 (11), 蠟燭商 (11), 金物屋 (10), 魚屋 (10)
製粉・醸造業	249	粉屋 (130), 麦芽製造業者 (82), 水車大工 (18), 醸造業者 (15)
馬具製造・販売業	82	馬具商 (19), 蹄鉄工 (13), 馬丁 (13), 馬具製造業者 (12), 馬商人 (10)
革製品関係職人	923	コルドヴァ皮職人 (650), 靴職人 (201), 製皮工 (26), 獣皮 (羊皮) 職人 (18), 皮鞣 (13)
木材関係職人	1,353	大工 (678), 車大工 (228), 木挽 (153), 轆轤師 (81), 椅子職人 (76), 桶屋 (51), コルセット職人 (35)
金属関係職人	519	鍛冶屋 (380), 金属細工師 (52), 針職人 (22), 真鍮細工師 (14)
繊維関係職人	408	レース職人 (56), 織布工 (55), レース商人 (49), ズボン職人 (43), 襟職人 (36), マット職人 (33), 籠職人 (32), 手袋職人 (23), 羊毛選別人 (11), 縄紡ぎ職人 (10), 織布兼紡績工 (10)
その他職人	321	紙職人 (253), 時計職人 (36)
建築労働者	384	煉瓦積み工 (162), 石工 (79), ガラス職人 (65), 煉瓦職人 (20), 石工兼煉瓦積み工 (18)
水運労働者	85	伝馬船 (Barge) 船員 (68)
輸送労働者	48	運搬人夫 (21)
旅籠主人他	357	飲食店経営 (319), パブ経営 (16)
巡回労働者	59	行商人 (35)
サーヴァント他	147	家内サーヴァント (39), 獵場番人 (20), 執事 (17)
その他・不明	552	不明 (257), 徒弟 (247)

れている職業（および人数）を記した。10人という数字にさほどの意味があるわけではないが、あとでみるように州全体が10の地域に分けられるので、それぞれの地域に平均1人以上は存在する職業であるということになる。なおこれらの職業数を合計しても100に満たず、全職業の四分の三は州全体でも9人以下しか該当者がいないものであることを付記しておこう。

全体的な職種の数分布からどのようなことがわかるであろうか。もっとも人数の多い職種である「農業労働者」ともっとも少ない職種との数字の間には、じつに3桁の開きがある。ここでひとつ注意しておく、資料の性質上従軍中の者はリストから除外されるので、「地主階級」（さらに、たんに不在のためリストされない者もいる）や「専門職」の数は、よりいっそう少なく計上されている可能性が高い<sup>14</sup>。農業労働者は全体の58%近くを占めている。つぎに人数が多いのは「農場経営者」で、全体の1割を占める。これらの数字は、この時期バッキンガムシャーが基本的には農業州であったことを示している。農場経営者はほとんどがfarmerで、ほかに酪農専門の経営者が60人。両者を兼ねている者は、farmer & dairyman と dairyman & farmer の数を合計した数字であるが、おそらくそれぞれ最初に表記した仕事のほうが比重が高いものと推定される（これ以外でも同様の表記区分がある）。

農業労働者のなかでは労働者 (labourer) とサーヴァントがほとんどを占めるが、職務内容は両者とも多種多様であった。一般にこの時期両者を区別する規準は、サーヴァントが原則的に雇い主の家に居住し、雇用契約期間の標準が1年であったのにたいして、労働者のほうには雇い主の家には住まず、契約期間も週や日といった短い期間であった。ただし両者の区別には流動的な要素もあった。元来サーヴァントは子供が一定の年齢に達した時に他の家のサーヴァントとなり、成人年齢に達したらある段階で多くは労働者となっていった。つまりサーヴァントは“transitional occupation”という性格を有していたのである。とはいえ、サーヴァント兼労働者 (servant & labourer) と表記された者が238人と、少なからぬ数にのぼっており、これは両者をどのように兼職していたのか、実態が不明である。サーヴァントは通常衣食住の費用を雇い主が負担したが、それ以外に、一年契約は保ちながらもサーヴァントが自前で住居を確保する代価として“board wage”が渡されたケース、またサーヴァントが雇い主とは別の家主 (housekeeper) のもとに居住し、雇い主が家主にそのための費用を支払うケースもあったという<sup>17</sup>。サーヴァント兼労働者とは、このようななんらかのかたちでの両者の中間的形態であったと推測される。ちなみにサーヴァントと労働者をあわせた人数のなかでサーヴァントが占める割合は28.5%となる（上記兼職者は除く）。同じ時期の他州の平均的数字がなかなか得られないが、バッキンガムシャーに隣接するハートフォードシャーとノーサンプトンシャーのそれぞれ1758-9年と1762年の同種の史料からの数値によると、39%および48%となっている<sup>18</sup>。もちろん比較する時期も離れており、またこれらの州の場合は全教区の平均ではなく、農業中心の教区を対象にしているため、一概に高低を判断することはで

きない。ただ、ずっとあとの1831年センサスにおける各州のサーヴァントの比率をみると、バッキンガムシャーはすでに最低水準となっていることがわかる。<sup>19</sup>

農業以外の職種については、次節でもとりあげるが、特徴的な点だけ簡単に述べておこう。人数が千人を超えているのは「商業・サービス業」と「木材製品関連職人」の二つだけで、その他の職種はそれぞれの数を計上している。不自然に感じられるのは、農村工業の代表的存在であった「繊維関係職人」の人数がさほど多くないことである。一因として、すでに指摘したように兼職の表記が不十分なため、実際は副業として従事しながらもここでは他の職業に分類されている事例も多かったためと思われる。しかしより重要な理由は、この州の二つの重要な農村工業が、それが主として婦女子によって担われていたため、台帳ではその人数が実際より大幅に少なく表記されることになったからである。それは「レース編み」と「藁編み」である。

バッキンガムシャーにおけるレース編みの起源は中世末期まで遡り、17世紀になると本格的に普及し始めた。中心となったのはあとの地図のIの Newport Pagnell, Hの High Wycombe, Aの Aylesbury といった町だったが、州全体に広がっていき、18世紀にはその最盛期を迎えたのである。<sup>20</sup> 両者の産業の繁栄の実態について記録したものは、少なくない。農業改良委員会に提出された『バッキンガムシャー農業報告』の1794年版には、この地域の主要な製造業は製紙とレースであること、レースは多くの場所で婦人と子供によって編まれていることが記されている。<sup>21</sup> さらに報告書の1810年版にはつぎのような記載がある。

「レース作りと藁編みの仕事は、州のいたるところですべての婦人、少年、少女、児童を雇用している。救貧院でもそういった仕事をしている者を見かけずに通り過ぎることは不可能なほどだ。町々ではレース作りや藁編みの学校がある。これらの仕事はたいそう割が良く、若い婦人でも一日の稼ぎ額は…。[...] その結果困るのは農場主だ。婦人も若者も野良で働こうとはしない。じっさいバッキンガムシャーでは婦人が干し草作りや除草作業を行うところはめったにお目にかからない。<sup>22</sup>」

表ではレース職人やレース商人の人数は記録されているが、これは当然ながら実態を反映した数ではない。たとえば同じくIの Hanslope 教区では台帳ではレース商人6人、レース職人4人を記録しているが、別の報告書(1806年)ではこの教区の住民1275人中500人がこの業種に携わっているという。<sup>23</sup>

「藁編み」については、台帳のなかにはこういった職業記載はない。わずかに、藁編みの関連業種と思われる「マット職人」が33人計上されている。藁編みの主要な製品は帽子やボンネットで、多くが家内手工業として営まれていた。18世紀以降、外国製品の刺激を受けるかたちで近隣のベッドフォードシャーやハートフォードシャーでも、しだいに広がっていった。バッキンガムシャーの場合、小麦の藁が素材として適しており、18世紀末までには州全

体に普及していたという。とくにナポレオン戦争中に外国製品の輸入が下火になったことにより、レース編みと肩を並べるほど盛んになっていった。<sup>24</sup>

「その他職人」で「紙（製紙）職人」の数が多いことが目を引くが、これについては次節で扱いたい。「建設労働者」では性質上兼職者が少なくなかった。それを加算すると「配管工」も11人となる。この州では建築素材として適した石材資源が乏しく、煉瓦関係職人の数が多めとなっている。「巡回労働者」では Higler (= Higgler) と記されている「行商人」の数だけを表で記したが、実際は costermonger, hagglegartman, hagler, hawker, huckster, pedlar, pothawker などはほぼ同形態の職業と判断される。それらを合計すると、行商人は50人近くとなる。「サーヴァント他」にふくまれている39人の「家内サーヴァント」とは、州内の貴族を中心とする著名な数人の雇い主（家族）に雇用され、家事労働に従事している者である。この点でさきの「農業労働者」に分類されたサーヴァントとはまったく異なっていた。この職の場合、農業労働のサーヴァントとは逆に女性比がきわめて高かったため、実際にはこの程度の人数にとどまるものではなかったことが十分推測される。最後の「その他・不明」には247人の「徒弟」がふくまれている。この場合の徒弟とは、農家というより職人の家に居住し、その雇い主（親方・職人）は徒弟の親権者から生計費や教育（訓練）費を受け取るという点で、サーヴァントとは異なっていた。<sup>25</sup>

なおここでは対象を州の住人にかぎったため除外したが、台帳には州内60名の一時居住者（temporary residents）が記録されている。うち半数は Drayton Parslow 教区のエンクロージャー実施にともない、一時的に雇用されていた「生け垣作り」（quicker）および「柵作り」（railer）である。同教区のエンクロージャー法令は1797年に成立し、それを受けた実施であった。実施にあたっては、土地所有者たちは各自割り当てられた土地を所定の期間内に柵で囲まなければならなかったが、それ以外に公共の柵（教区牧師あるいは十分の一税徴収権所持者への割当地の柵）も造設する必要があったので、柵作り手への労働力需要は大きかった。しかしこの年の前後に州内で多数の教区の議会エンクロージャーが実施されたにもかかわらず（1797年だけでも6教区の法令が通過している）、<sup>26</sup>なぜ同教区だけこの作業を州外からの出稼ぎ労働者に頼っているのか、事情がわからない。ほかの一時居住者は、Penn 教区のフレンチ・スクールの教職員（フランス人）、また個人邸宅にロンドンから来ている使用人などが記録されている。

## 5 職業分布の地域的特色

つぎに州内のそれぞれの地域でこれらの職業・職種がどのように分布しているかを観察してみよう。地域を区別するにあたり、ここでは原則として郡（Hundred）を単位とする。バッキンガムシャーは中世のドゥームズデイの時期には18の郡に分かれていたが、13世紀の末

頃までには統合がすすみ、半減していた<sup>27</sup>。台帳では州を8つの郡と2つのバラ (Borough) に区分しており、ここでもこの10区分に従いたい。[表2]は10の郡およびバラそれぞれについて、表1で分類した職種の分布状況を、各人数の百分率で示したものである。ここではそれぞれの数値を、表の左の欄に記した州全体での平均値と比較することによって、職業分布の地域的特性を探ってみたい。なおそれぞれの郡およびバラの位置は、[図1]の地図で示した。また[図2]で州の全教区の位置を示したので、あわせて参照されたい。[図2]では出典の都合上、<sup>28</sup>教区の名称や区分が台帳と多少異なっているケースもある(たとえばGのGreat Marlowは地図ではたんにMarlowと表記)。以下の文中では紙幅の節約のため、それぞれの地域は表2で用いたAからJまでのアルファベットで表記する。

あらかじめことわっておくと、職種によっては表1でわかるように州全体で3桁の人数に達しないものもある。またそれぞれの地域にしても、総人数(総人口ではない)は4,000人を超える所から500人たらずの所まで、相当のばらつきがある。職種でも地域でも、母集団の少ないケースでは絶対数のわずかの違いで百分率が大きく変動することになり、その点注意が必要である。したがって、百分率の数値自体の緻密な解析を行なうことは避け、おおまかな趨勢をさぐることに主眼をおきたい。

じっさい、たとえば表2の最上段の地主階級から5番目の官職までは、それぞれ人数の絶対数も少なく、前述のように従軍中のため算入されていない割合も高いと推察される職種もあるため、百分率の数値の違いから地域的特色を議論することには無理がある。性質上国教会の聖職者は全地区にほぼ均等に分布しているのにたいして、国教会以外の聖職者は、台帳に300人以上の登録がある大教区をふくむE, H, Iがやや高い値を示している。

農業経営者および農業労働者は、農業州という性格を反映して、絶対数も多くそれぞれの地区に占める比率もきわめて高いものがある。ただし二つのバラ(C, H)では、当然のことながら両者の比率は他地区と比べるとめだって低くなっている。またこの表の数値からはわからないが、農場経営者のうち、酪農経営者(dairyman)は、Dに18人、Bに17人、Fに13人、Cに12人、これで表の総計数の60人となる。また牧畜業者24人のうち、Bに12名、Iに10人となっており、これらの地区に集中している。いずれの地区もエイルズベリー峡谷以北の州中北部に位置しており、南部の耕作地帯と対照的に酪農の比重が高かったことがわかる。商業・サービス業も全地区に満遍なく分布しているが、農業関係者とはまったく逆に、C, Hの二つのバラ地区でのみ比率が10%を超えていることも納得できよう。

つぎに製造業関係の各職種について、顕著な地域分布上の特徴がみられる業種をとりあげてみよう。「皮製品関係業者」は絶対数も多いが、表1をみると内訳は「コルドヴァ皮職人」が大半を占め、これに「靴職人」を加えると全体の9割以上を占める。前者の“cordwainer”は、元来は主として靴の材料となるコルドヴァ皮業者を意味するので、製靴業関係の比率が

表 2 郡別職種分布表 (百分率)

	州平均値	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
地 主 階 級	0.71	0.48	0.23	0	0.44	0.86	0.32	0.9	0.93	0.55	2.49
聖 職 者 (国 教 会)	0.48	0.37	0.23	0.62	0.39	0.33	0.51	0.21	0.52	0.5	1.37
聖 職 者 (非 国 教 会 他)	0.14	0.13	0.14	0.41	0	0.26	0.03	0.11	0.21	0.21	0.05
専 門 職	0.57	0.58	0.18	1.65	0.28	0.72	0.32	0.48	0.82	0.83	0.54
官 職 者	0.8	0.66	0.5	0.41	0.66	0.86	0.9	0.69	0.62	1.14	0.83
農 場 経 営 職 者	9.6	9.46	15.83	5.37	15.6	5.46	15.57	6	4.12	8.67	3.8
農 業 労 働 者	57.86	60.55	62.52	40.29	60.18	57.67	62.04	57.36	42.68	55.1	57.32
商 業 ・ サ ー ビ ス 業	6.48	6.8	4.17	13.43	3.82	6	6.06	4.73	10	9.1	5.85
粉 ・ 醸 造 業	1.06	0.93	0.5	0	0.83	0.95	0.68	2.28	2.78	1.07	1.12
馬 具 製 造 ・ 販 売 業	0.35	0.45	0	1.24	0.11	0.49	0.06	0.32	0.1	0.36	0.88
革 製 品 関 係 職 人	3.93	3.83	2.71	6.61	2.54	6.91	2.9	2.76	4.85	4.11	3.41
木 材 関 係 職 人	5.76	6.03	4.01	6.2	3.6	8.43	4.13	5.63	12.58	4.8	6.24
金 属 関 係 職 人	2.21	2.23	2.43	1.65	1.38	2.8	1.9	2.44	2.78	2.02	2.29
織 維 関 係 職 人	1.74	1.67	0.6	3.72	0.77	1.71	0.87	1.06	2.37	3.83	0.83
そ の 他 職 人 者	1.37	0.45	0.05	1.03	0.28	1.38	0.13	5.36	11.13	0.5	0.83
建 築 労 働 者	1.63	1.7	1.01	3.1	1.44	2.11	0.93	2.02	1.96	1.78	1.51
水 運 労 働 者	0.36	0.08	0	0	0	0.1	0	3.82	0	0	0.34
輸 送 労 働 者	0.2	0.08	0.09	0.21	0.06	0.23	0.1	0.05	0.1	0.52	0.34
旅 籠 主 人 他	1.52	1.49	1.19	1.86	1.11	1.58	0.87	1.43	2.68	1.64	2.39
巡 回 労 働 者	0.25	0.21	0.14	0.21	0.28	0.3	0.35	0.16	0	0.36	0.2
サ ー ウ ェ ン ト 他	0.63	0.11	0.41	0.62	1.83	0.46	0.19	0.42	0.1	0.59	1.59
そ の 他 ・ 不 明	2.35	1.67	2.94	11.36	4.42	0.39	1.13	1.75	0.52	2.33	5.41
人 数 合 計	23,487	3,762	2,180	484	1,808	3,038	3,103	1,883	970	4,209	2,050

郡名称 A : Three Hundreds of Aylesbury B : Ashendon Hundred C : Buckingham Borough  
 D : Buckingham Hundred E : Burnham Hundred F : Cottesloe Hundred  
 G : Desborough Hundred H : Chepping Wycombe Borough  
 I : Newport Hundred J : Stoke Hundred

図 1 バックinghamシャー郡区分地図

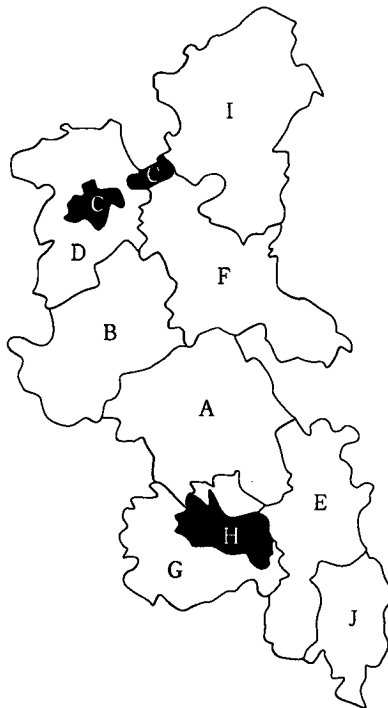
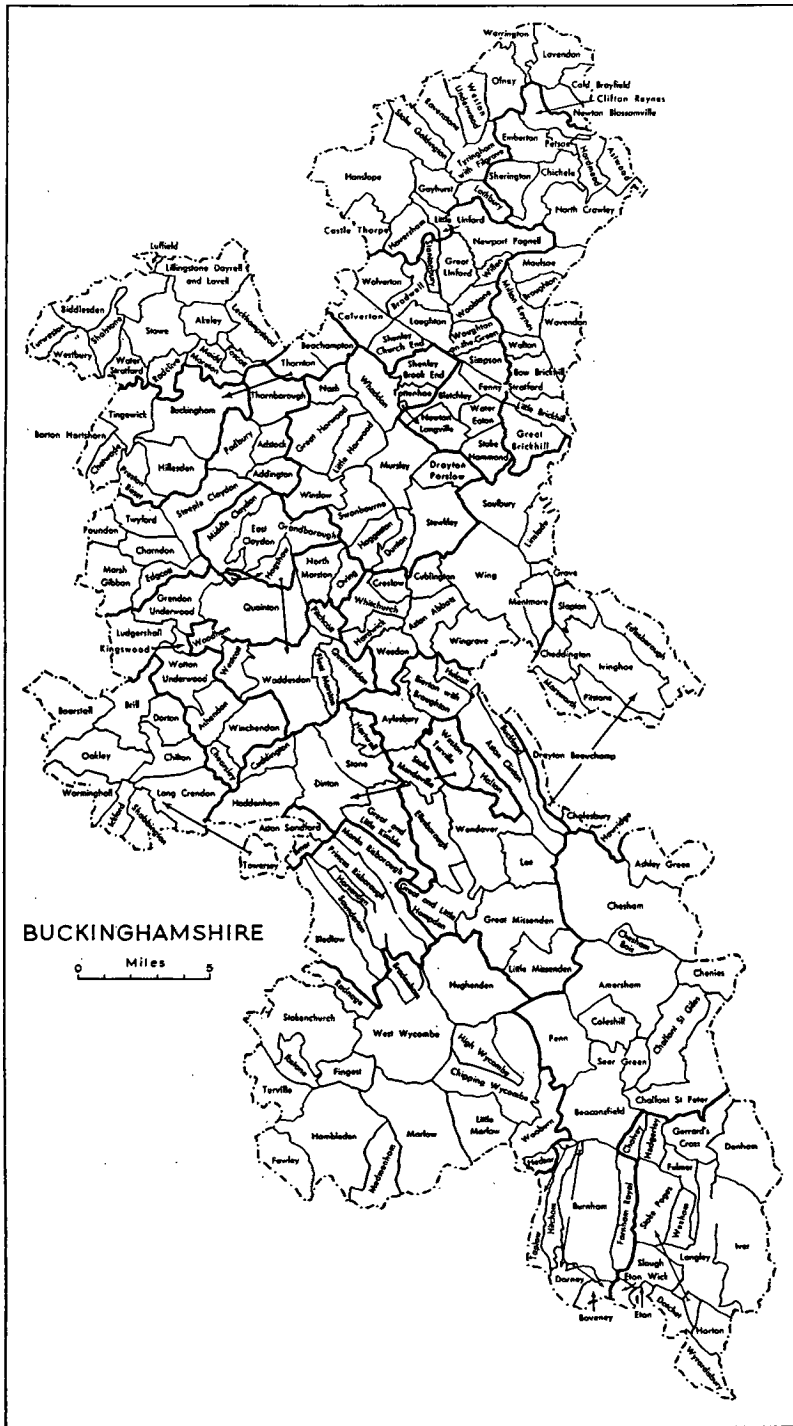


図2 バッキンガムシャー教区区分地図



圧倒的に高かったということになる。ただし、この語はすでに17世紀には靴職人を意味するものとしても使われていた<sup>29</sup>ので、おそらくここでも靴職人が相当数ふくまれていると推測されよう。表によればこの業種ではCとEが目立って高い値を示している。これは、それぞれの地域にこの時期に州の皮革産業の中心であった Buckingham と Chesham がふくまれていたことが大きい。とくに Chesham は靴・ブーツの生産では全国的に著名で、製品はロンドン市場へ、のちには海外へも供給されたが、伝統的に各職人の家内工業として手作り生産<sup>30</sup>されていた。台帳では Chesham に77名もの「コルドヴァ皮業者」の存在を記録している。

「木材関係職人」の数は22の職種なかでは4番目に多い。内訳をみるとやはり「大工」や「車大工」の数が多く、またどの地区にも滴遍なく分布している。地域別の数字では、E、とくにHが際だって高い割合となっている。上の Chesham はやはりこの時期轆轤細工(turnery ware)でもよく知られており、台帳では31名の轆轤師が確認される。州南部ではチルトーン丘陵のブナを素材に、古くから木材製品作りが広く行われていた。とくにこの時期に急成長したのが椅子作りであったが、Hはその一大中心で、バラ全体で58名の「椅子職人」が記録<sup>31</sup>されている。のちに19世紀の半ばにはロンドン万博会場の水晶宮の椅子も提供した。

「金属関係職人」の場合は、blacksmith, smith といった「鍛冶屋・金属細工師」が大半を占める。地域的にもとくにきわだった分布上の差異はみられない。ただ著しい地域特化を示しているのは、「針職人」のケースである。絶対数が少ないため全体のなかで高い比率としては記録されていないが、州で都合22人の針職人のうち21人がBの Long Crendon 教区に居住していた。すでに16世紀の半ばにはここで針製造が行われるようになっていたが、この場合も伝統的に手作業であった。また5家族だけで担当され、主たる担い手であった Shrimpton 家の姓が12人に<sup>32</sup>のぼる。

前節でみたように、「繊維関係職人」ではレース編みと藁編みの人数の欠落が大きく、この時期の繊維産業の実態を忠実に反映する数字からはほど遠い。それでも台帳の数字のみに依拠すると、地域的にはCとIがやや高い比率となっている。Cではここにふくまれるどの職業もきわだって高い人数を記録してはいないが、この地域の全体の人数がきわめて少ないため、結果的にはこのように高い数字を示している。Iではレース職人・商人があわせて76人記録されており、なかでも Olney 教区に29名の職人が集中している。しかしこれらの数字は、いわば氷山の一角と理解すべきであろう。

「その他職人」では、「紙(製紙)職人」の数が著しく多いのが目を引く。バッキンガムシャーは、テムズ川流域付近を中心として、17世紀以来製紙業を発展させ、18世紀には印刷用紙の新製法がここで生み出されたこともあり、レースや藁編みとならぶ重要産業となった。テムズ川は水力を提供し、ロンドンを近隣市場とする水運の便も提供することによって、この発展を支えてきたのである。なかでもHは早くから州の製紙業のメッカとなり、台帳には

97人の紙職人を記録している。Gでも製紙業の比率は高く、ともにテムズ川沿いの Wooburn に62人、Marlow に12人の紙職人が記録されている。<sup>33</sup>

「建築労働者」も性質上地域的な偏りはみられないが、つぎの「水運労働者」は、絶対数が少なく、地理的事情に左右されるため、大半の地域で一人も記録されていない。68人の伝馬船 (barge, 平底荷船) 船員のほとんどがテムズ川沿いのGに集中している。早くから通商の大動脈であったテムズ川は、一方で季節により航行不能のケースも多く、慎重な操作の必要な数多くのロック (flashlock) や通行税徴収所なども存在し、抜本的な対策が必要な状態であった。17世紀末から治安判事によって改良委員会が組織されたが、その活動が本格化したのは、1770年頃以降である。すなわち委員会が引船道 (towpath) の権利を買い取って通行負担を引き下げたり、より操作の容易なロック (poundlock) に替えるといった事業をおこなった。1770年代には Hambleton や Marlow でこうしたロックが完成している。そして1790年にはオックスフォードとコヴェントリーを結ぶオックスフォード運河が完成し、トレント、セヴァーン、マージー、テムズのイングランド四大河川網が運河により結ばれることになった。<sup>34</sup> 伝馬船船員の数はテムズ川沿いに上流からあげていくと、Great Marlow に35、Little Marlow に6、Wooburn に20、Hedsor に2、Eの Taplow に3と記録されている。

最後の「その他・不明」でCの比率が高くなっているのは、徒弟の割合が州全体の平均よりも5倍以上大きいためであるが、絶対数は少ない。

## 6 おわりに

本稿は、ほぼ完全な状態で残っている唯一の1798年『台帳』からの情報により、この時点でのバッキンガムシャーの職業分布を観察してきた。全国的には「産業革命」たけなわのこの時期、もし同じ規準で作成された台帳が適度な時期的間隔で複数存在すれば、職業構成のダイナミックな変化や産業の地域特化などがより鮮やかに描写できたはずである。じつはこの州では1757年法の2年後に作成された民兵台帳 (Militia List) も、8つの郡のうち7つについて現存している。ただしこの場合は対象となった人数がずっと少なく、また [表1] であげたような職種の分類も、farmer, trademan, craftsman, servant, labourer, no trade と、ごく単純な方法にとどまっている。<sup>35</sup> それ以外の時期のリストは比較しうる情報がきわめて乏しい。また、19世紀に入ってから、<sup>36</sup> なんとか台帳は作成されているが、規準と対象が変わっている。

1798年の台帳の職業分布は、基本的に日常生活の必需品の需要に応えるような多様な伝統的手工業が広範に分布している一方で、バッキンガムシャーの特産品となるいくつかの産業が、場合によっては強い地域的特化をとめないながら成長しつつあるという、発展の一断面図を提供している。この年の台帳に比べると対象となった人数がはるかに少なかった、上記

の1759年の台帳も、6人の製紙業者や伝馬船船員・船主がGに「集中」していることを記している<sup>37</sup>。しかしくり返すが、こうした産業の発展はこの時期にはまだ機械技術や生産組織の大幅な変化を随伴したものではなかった。19世紀に入ってこれらの産業はさらに発展し、製品の販路も大きく拡大していったのである。

河川を中心とする水運は18世紀半ばに著しい改善をみたが、運河、そして当然のことながら鉄道インフラの本格的整備も19世紀前半を待たねばならなかった。1790年代にはテムズ川下流の Brentford から北西に伸びてオックスフォード運河とつながるグランド・ジャンクション運河（のちのグランド・ユニオン運河）の開削が始まった。これはしかし難工事で、州内の Wolverton には水路橋 (aqueduct) がかけられることになったが、1805年には本線が完成した。その後 Aylesbury や Buckingham, Newport Pagnell といった人口の多い町を結ぶ支線が完成し、石炭のような嵩のある商品の輸送が格段に容易になった<sup>38</sup>。ただし1798年の時点で作成された台帳では、この運河に影響されたとみられる職業構成上の特徴は読みとることができない。いずれにしても、1798年の台帳が示すバッキンガムシャーの職業分布は、産業革命の時期にその直接の担い手となった工業地域・部門を有しなかった地域・州の経済構造の一端を示すものであり、さらに異なった視点からの分析により明らかになることも多いと思われる。

#### 注

- 1 一例として、近年わが国においても坂巻 (1999)、酒田 (2000) らの業績がある。
- 2 ただし A. B. Crossman による短い論文 ("The Bucks Posse Comitatus, 1798", *Milton Keynes Journal of Archaeology and History*, 2 (1973), pp. 24-28) は、掲載誌の所在を特定しえず、遺憾ながら参照できなかった。
- 3 残存状況については Beckett (1985), pp. 363-4 を参照。
- 4 Beckett (1985), pp. vii-xii.
- 5 Page (1969), vol. II, p. 96.
- 6 Kussmaul (1981), p. 176, n. 10.
- 7 Beckett (1985), p. xix.
- 8 Thirsk (1984), vol. I.
- 9 Reed (1979), p. 25.
- 10 Page (1969), vol. II, p. 37.
- 11 Reed (1979), p. 25.
- 12 Page (1969), vol. II, pp. 38-9.
- 13 Beckett (1985), p. xv.
- 14 Beckett (1985), p. xvi.
- 15 分類がややことなっているので正確な比較はできないが、19世紀初頭の時点でイングランドおよびウェールズ全体で農業労働者の家族数の割合は、15.5%となっている。Mitchell (1988), p.

102.

- 16 Kussmaul (1981), p. 4. ちょうどこの時期にそのような経歴を辿った人物を描写した拙稿(1997)を参照。
- 17 Kussmaul (1981), p. 7.
- 18 Kussmaul (1981), p. 18.
- 19 Kussmaul (1981), p. 127.
- 20 Page (1969), vol. II, pp. 106-7.
- 21 Marshall (1818), vol. 4. p. 497.
- 22 Marshall (1818), vol. 4. p. 515.
- 23 Beckett (1985), p. xviii.
- 24 Page (1969), vol. II, p. 113.
- 25 Kussmaul (1981), p. 4.
- 26 Tate & Turner (1976), p. 68.
- 27 Page (1969), vol. II, p. 39; Mawer & Stenton (1969), pp. 2-3.
- 28 Mawer & Stenton (1969), 付録図。
- 29 *Oxford English Dictionary* (1992).
- 30 Page (1969), vol. II, p. 112.
- 31 Page (1969), vol. II, pp. 109-110.
- 32 Beckett (1985), p. xvii; Page (1969), vol. II, p. 127.
- 33 Page (1969), vol. II, pp. 111-112.
- 34 Reed (1979), pp. 206-8.
- 35 Beckett (1977).
- 36 Beckett (1985), p. xiv.
- 37 Beckett (1977), p. 464.
- 38 Reed (1979), pp. 208-9.

#### 参 考 文 献

- Beckett, I. F. W. (1977), "Buckinghamshire Militia Lists for 1759: A Social Analysis", *Records of Buckinghamshire*, vol. 20, part 3, pp. 461-469.
- Beckett, I. F. W. (1985), *The Buckinghamshire Posse Comitatus 1798* (Buckinghamshire Record Society).
- Kussmaul, A. (1981), *Servants in Husbandry in Early Modern England* (Cambridge).
- Marshall, W. (1818), *The Review and Abstract of the County Reports to the Board of Agriculture from the Several Agricultural Department of England*, vol. IV (York).
- Mawer, A. & F. M. Stenton (1969), *The Place-Names of Buckinghamshire* (Cambridge).
- Mitchell, B. R. (1988), *British Historical Statistic* (Cambridge).
- Oxford English Dictionary*, *The*, second ed. on CD (Oxford, 1992).
- Page, W. (ed., 1969), *The Victoria County History of the County of Buckingham*, 4vols (London).
- Reed, M. (1979), *The Buckinghamshire Landscape* (London).

Tate, W. E. & Turner, M. E. (eds., 1976), *A Domesday of English Enclosure Acts and Awards* (Reading).

Thirsk, J. (ed., 1984), *The Agrarian History of England and Wales*, vol. V-I: *Regional Farming System* (Cambridge).

酒田利夫 (2000) 「近世ロンドンの職業構造」, 同著『イギリス社会経済史論集』, 三嶺書房, 123-146 頁。

坂巻清 (1999) 「一六、一七世紀前半ロンドンの職業構造変化とリヴァリー・カンパニー」, イギリス都市・農村共同体研究会編『巨大都市ロンドンの勃興』, 刀水書房, 261-294頁。

重富公生 (1997) 「工業化期イングランドにおける一地方住人の労働世界」, 『国民経済雑誌』第176 卷第 3 号, 75-92頁。